

かんべむさし

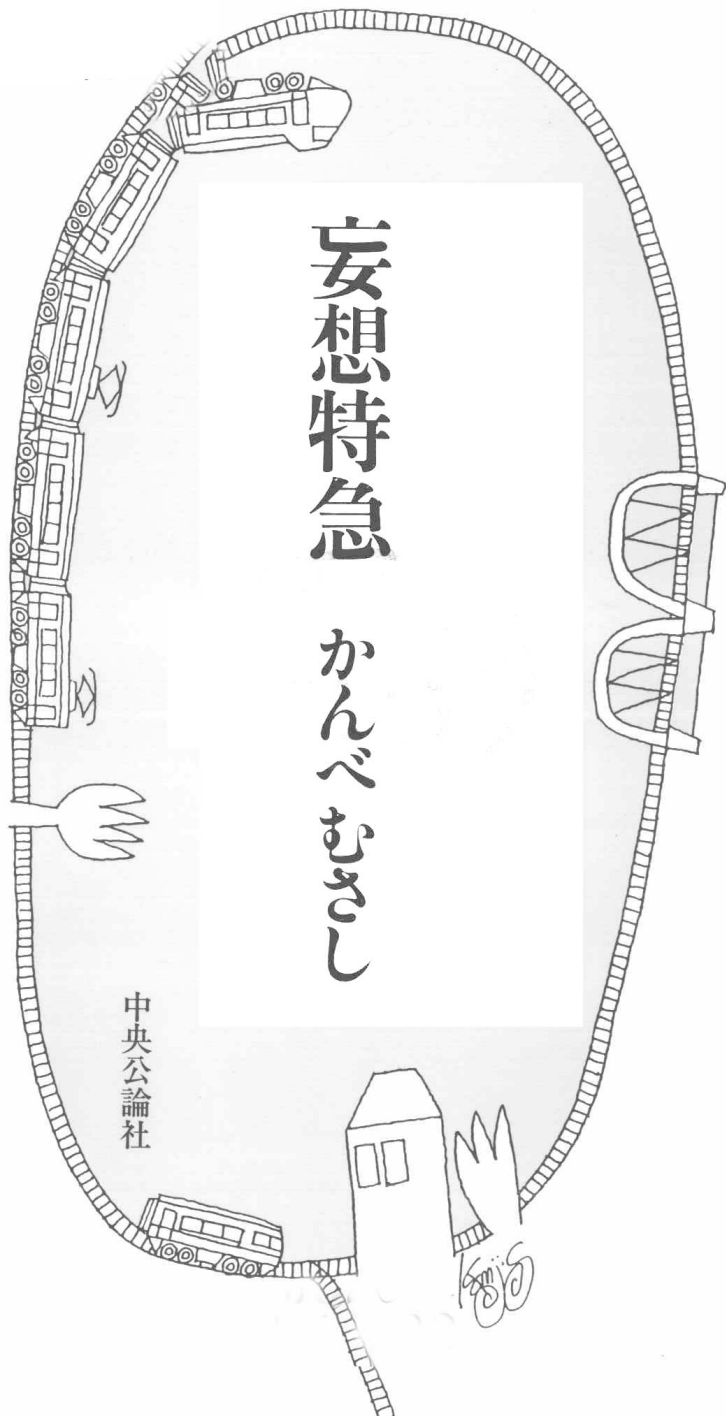
妄想特急



妄想特急

かんべむさし

中央公論社



妄想特急

定価 一二〇〇円

一九八八年一〇月一〇日 初版印刷
一九八八年一〇月二〇日 初版発行

著 者 かんべむさし

発行者 嶋中 鸚二

印刷所 三晃印刷

製本所 矢嶋製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七
番 振替 東京二一三四

© 1988 Printed in Japan

ISBN4-12-001732-X

目次

腹立ち特急

大名行列

夜の裏側

三段跳権左疾走
さんだんとびごんざのはやがけ

ダイ君の変身

女は解決

虚空の早春

踊る七福神

俺たちの円盤

妄想特急

5

27

57

75

109

127

147

181

203

241

装帧
佐々木
侃司

妄想特急

腹立ち特急

一気に駆けあがりたい、地下鉄の急階段。

そこを混雑ぶりにイライラしつつようやくのぼりきり、改札機をぬけて早足で歩いた。

走りたいけれど、それが不可能である歳末セール中の地下商店街。その無茶な人混みにますます焦りながら、すりぬけ、かきわけ、横に飛んだりもして、先へと進んだ。

昨夜会社の忘年会で深酒をしたため若干二日酔いである頭には、進路妨害者に対するどなり声が、切れ目なく浮かんでくる。

えいくそ。どけどけ。おまえらは遊びが目的で歩いとるんやろ。ねえ、土曜の午後は映画でも見ないかい、あら、いいわねえか何か言うて、阿呆づらさげてここまで出てきたんやろ。俺は違うんや。用事がある。親戚の結婚式に出ないかんねや。一時ジャストの特急に乗らな、間に合わんねや。どけどけ、どいてくれ。頼むさかいに、道をあけてくれ。

礼服の入ったバッグを持ち替え、ちらっと腕時計に眼を走らせると一時七分前。

「あかん。こら、走らな間に合わん」

くそったれめが、あのドタヌキめ。ほんまにもう、覚えとれよ。そのうち何か、痛いめに合わせたるさかいにな。

切迫の原因を作った課長を心のなかでのしりながら、俺は遂に走り出していた。追いつき際に男に肩をぶつけ、非常識にも横に並んで歩いてきた女学生の三人連れを迫力によって一瞬で分離させ、なにしろ関西電鉄一時の特急に乘らねばならんと、ターミナル駅めざして必死に走り始めていたのである――

そもそものが、今日は会社が休みの土曜であるからして、俺はゆっくりのんびりと田舎へ戻るつもりだったのだ。式は会場の都合で夕方の四時から。したがって、ここ植木橋を十一時に発車する特急に乗れば、猪坂には午後の一時少し過ぎに到着する。そこからタクシーを利用すれば実家に着くのが二時前という見当で、何ならひと眠りし、すっきりしてから式場へと思っていたのである。しかるに、昨日の夕方忘年会の前に、突然課長が狸腹を突き出し、傲然たる口調で命令しやがった。

「ああ、明日の昼前、カタコ物産の会長さんが、奥さんと一緒に温泉旅行に出かけられる。社長、部長、それに僕。三人が見送りに行くから、君も来るように」

それはまあ、確かにカタコ物産は我が社の取引先であり、俺は乾物海産物類の担当者として、ほぼ毎日その連絡を取ったり出向いたりしている。しかし、八十に近い御老人夫婦が温泉へ出かけるからといって、何も二十三歳の若僧、ただの平社員に過ぎない俺までが、見送りに行かぬ

ばならん理由などないだろう。つまりは頭数を揃えて御機嫌をうかがおうという魂胆であつて、会社組織とはいえ所詮個人商店と変わらぬ小さな商事会社、人を丁稚扱いにして何とも思つてはいないのだ。

しかも、その出発駅というのがJRの大梅で、これは関鉄のターミナルより、ずっとずっと北の方にある。だから俺がアパートからそこへ行こうとすると、一度地下鉄で植木橋を通過しなければならぬ。通過して見送つて、そしてまた戻つて来なければならぬのである。時間は大丈夫なのか。俺は十一時の特急に乗れるのか。心配になつて聞くと、課長は平氣な顔でこたえてきた。

「まあ、十二時には乗れるダロ」

何が、乗れるダロや。ちよつと東京の学校出たと思つて、江戸っ子弁遣いやがつて。

俺はカリカリしながら、しかし宮仕えの身ゆゑ拒否もできず、御老人夫婦の出発を最敬礼でもつて見送つてきたのである。

しかるに、そのまま解放してくればいいものを、社長と部長が用事で帰つたあと、課長めは俺を喫茶店に連行しやがつた。

「君、その服装は何だ」

「はあ？」

「はあじゃない。失礼だろうが、取引先の会長御夫妻に対して。え」

礼装は式場で着用しておればいい物であり、関鉄特急の、始発駅から終点ふたつ手前の駅まで

着て乗る物ではない。着ても別に怒られはしないが、こちらの肩が凝って身体が疲れてしまう。そこで俺は道中リラックスして帰ろうと思い、ジーンズに白のセーター、その上から赤のダウン・ジャケットという姿で大梅駅へ行った。そして会長に挨拶したところ、相手は驚いたような声でこう言った。

「へへえ、この子、お宅の社員さんですかいな。私はまた、どこぞの学生さんかいなと思てました。お若いですなあ」

その言葉に別に不快や嫌悪の感はなく、むしろ好意の響きさえあったと俺は解釈したのだが、狸はそうは取らない。これは必ずや会長の御機嫌斜めとなったに相違ないと断定し、やれ非常識だの世間知らずだの、これが商売に悪影響を及ぼしたらどうする気だの、くどくどねちねちと文句をつけてきた。

「大体が、君のその頭にしてもだな」

遂には俺の短く刈った頭にまでイチヤモンをつけ、いつまでも学生気分でいるなら俺にも考えがあるぞと、生意気にも地位をかさに着て脅迫しやがったのである。

「ほっといてくれ。俺の頭をどう刈ろうと、俺の勝手じゃ。おまえに散髪代を出してもらてるのと違うわい」

言いたいのをぐっとこらえ、ようやく放免となって時計を見れば、すでに十二時は過ぎている。乗れるダロどころか一時発にも危ない時刻であり、さればこそ俺は地下鉄の車内でも足踏みをし、到着するや唇をかみしめて階段をあがった。そして改札をぬけるなり速歩、速歩から駆け足へと、

焦りのテンポを急変させていったのである。

「あと三分。ええい、どけっちゅうのに」

やっとの思いで地下街を走りぬけ、関鉄ターミナルへの連絡通路に入る。そこを全力疾走して植木橋駅構内に入り、階段を今度は一気に駆けあがって二階のコンコースへ。切符売り場に突進し、もし当日指定券が売り切れていたらどうなるのだと、一瞬恐ろしいことを考えたが、聞いてみなければわからない。

「一時発猪坂まで大人一枚特急券とも」

「はい」

ありがたい。席は残っていた。

「どうぞ。2号車12番のC席です」

千円札を三枚出して釣りと切符を同時に受け取り、釣りはそのままポケットへ、切符は右手にしっかりと持って改札口へ。

「おまたへをいたしあしたあ。う、さんばんすえん、いちじはつう、たいみさきゆきい、らいとにんぐとつきゆうう。う、たらいまあ、はっしやあいたしああすう……」

アナウンスの流れるなかブザーが鳴り始め、車掌はすでに乗務員室の窓から上体を乗り出して、ホイッスルを口に当てている。

「待って、待って。待ってくれええっ」

叫んで最後の全力走をし、俺はあわやという瞬間に特急の最後尾車両最後部ドアから、車内へ

と飛び込んでいた。

「よかった。間に合うた」

とりあえずはそれだけが嬉しく、しばらくはそこに立ったまま、胸の苦しさ呼吸のつらさを静めようとしていたのである。

植木橋を出て高層ビルの建ち並ぶ地域を通過し、商店や住宅が混在する地区にかかる頃になって、ようやく俺はひと息ついて指定座席へと車内を歩き出していた。

このライトニング特急は四両編成で全席指定となっており、植木橋から海の名勝鯛見崎まで走っている。つまり観光客用のレジャー特急なのであり、そのため全線百キロ余り、中間で県をひとつ完全に横切って行くのに、途中の停車駅が五つしかない。植木橋を出てしばらくの間にふたつ止まり、あとはノン・ストップで突っ走って、終点も近くなつてからみつつ止まる。その間はひたすら野を駆け山裾をまわり、客達に季節に応じた景観を楽しんでもらおうというのである。したがって座席も片側二人のロマンス・シート方式を取っており、リクライニングでゆったりとくつろいでおれば、若い女の子がおしほりを持ってくる、ワゴンを押して酒や弁当を売りにくる。まずは、至れり尽くせりのサービスを用意しているのである。

師走であるため、泊まりがけで忘年会でもしようという連中だろうか、俺が4号車3号車と通りぬけて行くと、右にも左にもさまざまな団体客が座っていた。会社の部か課の一行に違いないやつらがあり、趣味の会か何かの仲間らしい人達もいる。老人達もいて、ときには子供連れの夫

婦も乗っており、それは2号車に入っても同じことだった。

「ようまあ、席が取れたことやな」

ほぼ満席という状態に感心しながら自分の席に到達すると、なるほど取れたはずで、左窓際のD席には、ごつい身体の中年男が一人で腕組みをして座っていた。ジャンパー姿の赤ら顔であり、観光客でないらしいことは、その雰囲気からすぐに見当がつく。

「仕事か家の用事か、何かそんなことやろ。それで一人で乗って、その結果その横の席だけが最後まで残ってたんやろう」

俺は推測しながら男に軽く目礼し、バッグを網棚にあげてC席についた。相手は礼を返すこともなく、やはり腕を組んだまま正面を見つめて座っている。まあ、ごちゃごちゃと話しかけられるよりはましな。思ってた俺も、とりあえず沈黙のまま前を向いたのである。

そうこうするうちに、特急は早くもふたつめの停車駅を出て、スピードを上げ始めた。

女の子が配って行った熱いおしぼりと、少し強めに効いている車内暖房。その双方の作用で顔がほてり出し、二日酔いが復活再生してきたのか、頭もどこか重い。

どうしようかなと、ダウン・ジャケットをぬいで膝の上に置きながら、俺は考えた。

昼飯もまだなんやから、車内販売がまわってきたら弁当を買おか。そしてそのとき缶ビールも買い、すぎ腹と二日酔いを一遍に退治してしまおか。けど、四時からの式ということは五時から披露宴ということで、俺はそこでまた飲まないかという理屈や。ううむ、やっぱり弁当だけにしとこかいなあ。

通路をへだてたA席B席、それにその前後二、三席の親爺連中おやぢはひとかたまりの団体らしく、すでに旅行気分を持ち込みのカップ酒を配り、鱈たらの干物で飲み出している。思わず職業意識が出てその袋に眼をやると、カタコ物産とは競争関係にある会社の製品だった。

「それにしても……」

俺は正面に向きなおって眼を閉じ、連鎖的に会長から狸課長へと思考を移していた。

俺はやっぱり学生に見えるのかなあ。あのお爺さんなんか、この子という言い方をしとった。確かにまあ、あの人から見れば子供どころか孫にさえ思える年齢やろけど、これでも歳相応としあての仕事はしてるつもりなんやがなあ。それを何やと、あのドタスキめ、いつまでも学生気分でおるなら、俺にも考えがあるやと。何をぬかしやがんねん。考えがあるなら、言うてもらおか実行してもらおか。

考えは結局さきほどの腹立たしい出来事に戻り、それでなおのこと顔を熱くして、俺はいささかところどころとしてきた頭で、なおも狸をののしっていた。

俺を首にでもすると言うなら、そのときには黙ってへんぞ……。おのれが経理に出してる接待費用の領収証、どこでどんな具合にして手に入れた物か、みな言うてしもたんねやさかいに……。チビで童顔やからと思って、人をなめたら承知せんぞ、ほんまにもう。何、クワイ頭？ やかましいわ。人のことはほっといてくれちゅうんじや……

ののしりつつ周囲のざわめきを耳に受け、しかしそれが次第に遠くなっていくと感じ始めたとき、どうやら眠りの世界がその扉を開いたらしい。狸に対する反感のみは覚醒しており、ために

心地よい入眠というわけにはいかなかったが、とにかく俺はそろりとそこに入り、そのまま寝てしまっていたのである。

するとその頭に、どこからか、若い男の物らしい声が聞こえてきた。にいちちゃん。ちょっと、にいちちゃん。にいちちゃん……

ぶっきら棒な口調であり、しかもその繰り返しは、どんどん不機嫌かつ横柄おうべいなものへと変化していつている。

「にいちちゃん。おい、にいちちゃんよ！」

何や。誰や。この俺に何か用事か……

頭のなかで問いを返すと、相手はそれでは不満らしく、さらに声を大きくした。そればかりか、俺の肩までゆすり始めた。

「にいちちゃん。ちょっと起きいな、え」

ハッと気がついて眼をひらき、けれども身体はまだ動かぬまま、俺は一瞬となりの席に眼をやった。だが中年男はあいかわらず腕組みしたまま正面を向いており、そこで思うに、そもそもゆすられた肩はこちら側ではなかった。それに第一、この男にあんな若い声は不釣り合いだ。えとあの、どなたですか。俺は心のなかでうろたえ気味につぶやき、反対側に顔を向けた。そしてようやく、いまの声および行為の相手を確認していた。

「切符」

「へ？」